

Ismail Kadare におけるホメーロスの解釈

— 小説『怪物』に見られる「トロイア陥落」 —

井浦 伊知郎

0.序

イスマイル・カダレ (Ismail Kadare) は第二次世界大戦後のアルバニアを代表する作家の一人であり、社会主義時代から現在を通して数多くの小説や詩を発表し、その一部は欧州各言語にも翻訳されている。

彼の作品には、現実の戦後アルバニア社会を描いたもの(『死せる軍隊の将軍』『偉大なる冬』など)だけでなく、現在とは別の時間(おそらく中世～オスマン帝政期)の別の世界(おそらくバルカン地域、あるいは神話世界)を舞台としたものも少なくない。これについては(現体制を直接的に取り上げることがはばかれる)社会主義体制下での出版統制を意識したものとする見方が従来からあるが、必ずしもそれだけではなく、複雑な比喩と幻想的描写を駆使することによって作品の多義的な読みを可能にし、バルカン世界に限定されない普遍的なテーマを展開させているとする評価もある。

またカダレの作品にはギリシア世界、とりわけ古代ギリシアの作家やギリシア神話中の登場人物がしばしば現れ、重要な役割を演じていることも、よく知られている(ちなみにカダレ自身が最も関心を持っているのはアイスキュロスである)。

本稿では、イスマイル・カダレの代表作の一つである『怪物 (Përbindëshi)』の内容と、その中で描かれるトロイア戦争とホメーロス(正確にはホメーロスその人ではないが)の役割について、簡単に紹介したい。

1.『怪物』の成り立ちと出版の経過

イスマイル・カダレは、1936年にアルバニア南部のジロカスタル Gjirokaštër に生まれ、1958年にティラナ大学の文学・歴史学科を卒業した後、モスクワのゴーリキー文学研究所に留学した。しかしアルバニアとソヴィエト連邦の関係

が悪化した 1960 年、他のアルバニア人留学生と共に帰国を余儀なくされる。1963 年に『死せる軍隊の将軍』¹⁾を發表して注目され、以来アルバニアで (1990 年代以降はフランスでも) 作家活動を続ける。

『怪物』は『死せる軍隊の将軍』に続いて執筆された。当初アルバニアの文芸雑誌「11 月 (Nëntori)」の 1965 年 12 号に掲載されるが、すぐに発行禁止²⁾となる。アルバニアの政治的体制転換直前の 1990 年にまずコソヴォで出版され、アルバニアでは翌 1991 年に出版された。いずれも、初出時に比べると大幅に改稿されている³⁾ (もともとカダレには頻繁な改稿癖がある)。同年フランス語版が翻訳出版され、1998 年の『全集』に掲載されたものが決定版とされている (本稿ではこの全集決定版にもとづいて説明を進める)。

2. 『怪物』のあらすじ

作品の (主要な) 舞台は、対ソ関係が悪化し、留学生が一斉に帰国した直後の 1960 年代アルバニア。帰国組 (作中では『失われた新世代』と呼ばれる) の一人 gent・ルヴィナ (Gent Ruvina) は、学生のパーティでレナ (Lena ヘレナ Helena の愛称) と名乗るブロンドの女性と知り合う。折しもアルバニアでは「トロイアの木馬」と題する外国映画 (1955 年の米映画「トロイのヘレン」と思われる) が上映されていた頃で、彼女は周囲から「トロイアのヘレネー」と呼ばれている (アルバニア語では『ヘレナ』も『ヘレネー』も Helena)。レナは婚約直前だったが、gent は婚約パーティの夜、レナを連れ出す。事実上の同棲を始めた二人には、博物館員であるレナの婚約者から脅迫状が届き始める。(以下、引用は特にことわらない限り拙訳)

レナの元婚約者の家族からは電報が届いていて、その電報を追う形で、彼女の返還を要求する脅迫の手紙も来ていたからだ。かくしてプリアモスは逃亡者の引き渡しを要求された。

一方、ティラナ郊外の平原には有蓋トラックが放置されているが、そこには正体不明の男たちが隠れている。彼らは隠れ家であるトラック⁴⁾を「木馬 (Kali i drunjtë)」と呼ぶ。そのリーダー格は「オデュッセウス・K」⁵⁾と呼ばれ、他に「アカマース」、「マックス」、「ロベルト」、「ミロシュ」、そして「木馬の設計士 (konstruktor)」と呼ばれる男たちがいる。彼らは何らかの破壊工作を練っているとと思われるが、作中でそれが明確に語られることはない。彼らは「木馬」の中で、「トロイア陥落」と「ティラナ陥落」を重ね合わせて空想に埋没する。また、「マックス」と呼ばれる男が実はレナの婚約者であり、活動に乗じてレナ

の殺害をもくろんでいることが語られる。

なお、題名の「怪物」が何をさしているのか作中ではっきりとは語られないが、(空想と現実の)登場人物たちが「木馬」について語る時、しばしば「怪物」の語を用いることがある。

3. 『怪物』における「トロイア陥落」

自国の報道機関が対立陣営の動向に「トロイアの木馬」なる常套句を用いるような社会的雰囲気の中、ゲントは学位論文のためのメモから、「トロイア陥落」の真相を明らかにする空想に埋没する。

一度ならず彼は、古代の年代記をすっかり疑ってみたい気持ちにさせられた。実際のところ、現象の堅牢な外殻の裏側に潜むものを探り出したい衝動にかられたのである。そんな衝動が最初に芽生えたのは、モスクワにいる時のことだった。[略] 彼が市当局のトラックのことを書き始めたのも偶然ではなかった。不思議なことだが、そのトラックに一頭の馬の姿が重なったように見えたのだ。

ふと、彼は或ることに気がついた。古代の出来事に疑念をめぐらしていると、トロイアの悲劇の結末が変わってしまうような気がしてきたのだ。

ゲントの思考実験のきっかけとなった疑問点は、そもそも「木馬」などといわれるようなものが存在したのか、仮に存在したとして、それが「トロイア陥落」という出来事に——様々な叙事詩で語られているほどの——役割を持っていたのかということである。

本当に木馬が存在し、本当にギリシア人たちはその木馬によってトロイアを手中にしたのだろうか？それともそれは、真のトロイア侵攻策から目をそらすための偽装工作に過ぎなかったのではないのか？

それは別に驚くようなことではなかった。とうの昔から知られていることだが、戦争の本当の原因も戦闘の開始も、戦力についての推測や推理さえも注意深く包み隠されており、ギリシア・トロイア戦争に関する記録は、一人の美女による空騒ぎの物語(彼女の恋の遍歴は実際にあったのかも知れないが)にすりかえられてしまったのだ。

そこで彼は、諸説を集めて再検討を開始する(ただし、それらの典拠は作中で明らかにされない)。

トロイアを陥落させたのは馬型の城壁破壊装置だったと書いている者もいたし、馬の絵を描いた隠し扉があって、そこを通して市中に潜入したと説く者もいた。あるいは、馬は扉でなくギリシア兵の衣服に描かれており、救いようのない暗闇の中で互いを見分けられるようになっていたとも言われる。

他にもいろいろな説があった。馬は、ギリシア軍の殺戮をまぬがれたトロイア人の家々の玄関に描かれたものだったとか、ギリシア軍はトロイア側を欺くために宿営地を焼き払ってヒッピオス Hippios 山へ隠れたが、その名が「馬 hippos」を意味しているからだろうか、しまいには、トロイアは騎兵部隊の攻撃によって陥落したのだという説まで

あった。

しかしゲントはいずれの説にも納得しない。彼の仮説はこうである。

木馬などなかったと考えてよいのかも知れない。それに対する反論はあるが、木馬が存在したと言っているのは、逃げ去ったトロイア人だけなのだから。

また別の説だが、木馬は存在しなかったにしても、何かしら基本的に似たようなものがあったということも考えられる。その場合は、その象徴的な存在が何ものだったのかを解き明かさねばならない。

さらにまた別の説もある。木馬は実在するが、それは真実を隠蔽するためのものに過ぎなかったのではないか、という推理だ。要するに、木馬は存在し、かつ同時に存在しなかった。この第三の説が、一番ありそうのように思われた。

もし木馬が存在したとすると、

幾多の戦闘を得て齢を重ねてきたトロイアが一頭の木馬ごときにうかうかと騙される、などという話があるだろうか？

という疑問がゲントの脳裏をよぎる。しかも彼は『オデュッセイアー』の中に次のようなくだりを発見して驚愕するのだ。

木馬の中に、我ら指揮官が潜んでいたその時、ヘレネーよ、おまえが来合わせたのだ。

原典を正確に引用すると、『オデュッセイアー』第4章 271～274 節で、メネラーオスはヘレネーに対し次のように語っている。

たとえばまたこの仕事にしろ、あの剛勇のつわものは、よく磨いた木馬に入り込み、大胆にもやりおおせた、そこへわれわれアルゴス勢の、みな選り抜きの勇士が揃って坐り込み、トロイア方に殺戮と死をもたらしたのだが、その折そなたも来合わせた。(與茂一訳)

そしてヘレネーが木馬の周りを三度回って、内部のギリシア兵に呼びかけるという場面が続くのだが、ゲント・ルヴィナはこれを「疑う余地なく、世界史の中でも際立って非合理的な出来事」と断じる。

トロイア勢は、まず木馬に穴をあけて中に隠れている鳩を見ようとした。ところが急に、自分たちが子どもじみた鬼ごっこをやっているような気分になり、またギリシア兵たちがヘレネーの誘惑に乗って返事をしなかったものだから、トロイア勢は木馬の中にギリシア勢がないものと信じ込み、その不吉な品を市中へと引き入れた。

だがそんな話を信じるなど、実に声をあげたくなるような勘違いではないか。ゆえに、内部にギリシア兵が隠れる木馬として語り伝えられるようなものは、存在しなかったのだ。

ゲント・ルヴィナは、「木製の馬」の背後に「大いなる策略」があり、「木製の馬」は——実在したとしても——あくまでそのカムフラージュに過ぎないの

ではないかと見る。それは、トロイア戦争におけるギリシア側の正当性を歴史に残すためのものであり、長期にわたるトロイア戦争の中で、繰り返される交渉の決裂と再開、双方の陣営内部での分裂や権力闘争がそうした流れを作り出したのである。以下、гент・ルヴィナの独言から抜粋する。

トロイア陥落のための悪魔のような方策を立てた時、あるいは「大いなる策略」と呼ぶところのものを発出した時、ギリシア側の指揮官たちは即座に、この「大いなる策略」は極秘裡に、あるいは偽装しておかれるべきとの意見で一致したのだ。

〔略〕隠蔽工作は第一に、無数のギリシア兵に対して為されるべき問題なのだが、その彼らはトロイアの地から帰還した後でさえ、そこで起こった事実をまったく知らず、本当に「木製の馬」によってトロイアを陥落させたと思ひ込んでいたのだ。彼らはそのようなうそいつわりを、それがうそいつわりだという自覚すらないままに、ギリシアやバルカン半島じゅうに広めたのである。

.....

かくも長期に及ぶ包囲の間、戦闘の休止中でも、ギリシア人たちは手をこまねいてじっとしてはいなかった。様々な手段を用いて彼らは、包囲されていたトロイア人の一部、とりわけ上級ないし中級の高官たちを、自分たちの側に引き入れたのである。要するに、包囲されているトロイア陣営の中に「親ギリシア」派を形成することに成功したのだ。

.....

「親ギリシア」のグループは、ギリシアとの和平を模索していた。一方で反対者たちは、後に残忍に処罰されることになるラーオコオーンを中心として、戦争の継続を主張していた。

.....

гентは思った。

「兵の一团をひそかに送り込むよりも、公式の使節団を送り込む方が、ずっとあり得る話ではないだろうか」

考えを整理してみれば、それは何かしら新しい発見であるように思われた。そうだ、使節団なのだ。こうした考えを補強するのが、メネラーオスの存在だ。彼はギリシアの指揮官の弟であるだけでなく、妻ヘレネーをめぐるあの一連の軍事行動に、初めから直接に巻き込まれていた人物でもあった。そのヘレネーは、彼らがどのような協定を結んだとしても、その補足事項にもとづいて身の安全を保証されただろう。

.....

それは、和平協定のための使節団でもあったろう。ホメーロスの語り伝えるところによれば、戦争末期の数ヶ月間、ギリシア側とトロイア側との間には、何度となく接触がはかられていたのである。ヘレネーの処遇をめぐる会談がおこなわれ、プリアモスはアキレウスに対し、息子の遺体の引き渡しを要求した。双方にとって、それほど受け入れがたいことではなかったはずだ。

実際の『イーリアス』第22～24章によれば、トロイア王プリアモスの息子ヘクトールはアキレウスと戦って殺される。ヘクトールはいまわのきわに自分の遺体を父に引き渡すよう懇願するが、アキレウスは聞き入れず、遺体を馬車にくくりつけて引き回す。プリアモスは神々に導かれて深夜アキレウスの幕舎を訪れ、莫大な黄金を渡して息子の遺体を引き取った。カダレはこの箇所を念頭に置いたのであろう。

しかしそこから先はカダレ独自の世界である。そこには、гент・ルヴィナが置かれていた 1960 年代アルバニア（だけでなく 1990 年代以降の世界）の動きが多分に反映されているように思われる。

「木馬は存在し、かつ存在しなかった」

これはどうやら真実らしく思われた。木馬は存在した。しかしそれは、ホメーロスが語り伝えたようなものではなかった。彼は改変を加えたのである。

「それは空っぽだった」

使節団は最初から存在していた。「木馬」も使節団も同時に存在していた。作戦行動は両面からおこなわれていたのである。

〔略〕それは、全ギリシア市民の名譽に関わることだった。

何十もの国家や民族が二つの敵対する勢力に分かれて対決するという、正真正銘の、それもおそらく地上で最初の世界戦争がおこなわれている状況下では、締結されて間もない和平協定を不実にも踏みにじるということが、国際世論を目の前にしたギリシアにとって恥ずべき汚点となるのは明らかだった。このような汚点を残してしまつたら最後、ギリシアとの間に様々な同盟関係や協定を結んでいるあらゆる国々は、ギリシアの和平蹂躪を、道義にもとるものだと好き放題に言い立てるだろう。そうなればギリシアの政治的地位は全面的な危機に陥ることになる。

そればかりではない。忘れてはならないことだが、ギリシア人は自分たちのことを「世界の太陽」だとか、「民主主義と文明社会のチャンピオン」などと称していた。しかもそれは事実であった。だがしかし、かような不誠実を為したとあれば、すべての人々に対してばかりでなく、何よりもまずギリシア市民に対して、とりわけ、道徳教育に最も重きを置くべき若い世代に対して面目が立たなくなってしまうのである。

.....

トロイア。三千年前。スカイア門。昼。ギリシアの使節団はトロイアに入り、城壁の外では「木馬」の建造が始まっていた。同じ頃、ギリシア軍が祖国へ帰還するかも知れない、という話が広まっていた。

.....

トロイア市内での会話は困難を抱えていた。外では「木馬」が完成間際だった。使節団と「木馬」は、この時点では離れ離れに存在していた。木馬は単なる贈り物で〔略〕ギリシアがトロイアへ置いてゆくつもりなのだ、という噂が飛び交っていた。

.....

「緊張緩和の機は熟した」と会議のスポークスマンは言ったかも知れない。

「トロイアもこれをさらに推し進め、この『雪どけ』^⑥を象徴する贈り物を受け取るのではないか」

.....

ラーオコオーンもその熱狂の只中にあつた。彼はこの和平協定にトロイアの不運を見ているのだが、彼に同調する者は確実に減っていた。事態の流れを速めようとするかのように、ギリシア軍は本当にトロイア周辺の幕屋を放棄し始めた。

.....

トロイア人たちは「木馬」に近寄ると、適当な側板を引き剥がして内部を覗き（『木馬』だから空っぽに決まっているのだが）、これをどうすべきか命令を待った。そして上からの命令は届いたが、これがどうもはっきりしないもので、あれこれと異論が錯綜したが、それもさほどの時間はかからなかった。同じ頃、きわめて不可解な状況下でラーオコオーンが死亡した。

.....

トロイア人たちは、もう一度「木馬」の内部を調べた後で、市の城門の一つからこれを引き入れた。たまたま「木馬」の高いところが城門よりも手のひら二つ三つ分ばかり

高かったので、市内へ入れるためには城門のアーチ状の部分を少し壊さなければならなかった。それで城門の骨組みが弱くなっただろう。ひょっとしたら、わざとそうしたのではないだろうか？

.....

ここで「木馬」は神話が示す通りの道筋にほぼ近付いてきたわけだが、唯一の変更点は、その中身が空っぽだったということだ。

ついに「木馬」は市内に入った。使節団はその頃、会談を早々と切り上げようとしていた。文書と印章が用意され、双方の官僚らが、条約の文言を最後にいま一度確認していた。使節団と「木馬」の両者がトロイア市内に居合わせるようになった。中核にあたる部分と外側とが、ようやく一つに合わさったわけだ。事態は終局を迎えつつあった。

.....

和平文書や諸々の協定、捕虜の交換、海路に関する相互協約、ヘレネー問題等、諸々の調印が済むと、使節団はようやくトロイアをあとにした。

.....

夜になると、ギリシアの艦隊はその見事な操船技術で手早く引き返してきて、トロイア近郊に兵を上陸させた。そして

「メネラーオスやオデュッセウスらは、城門を開けさせるべく、木馬の体内に隠れてトロイア市内への潜入をはかった」

との報を伝えて兵たちの士気を喚起し（そういえば、これら指揮官たちの姿は先程からギリシア軍勢の中に見当たらなかった）、おぞましき、最後の決戦へと彼らを駆り立てた。

これこそが、トロイアを陥落させた攻撃である。実際、その城門が開いたのは内部の誰によるものでもなく、戦闘の混乱の中でそうなったのだ。かような些細なことに気付くものなど、誰一人としていなかったのだから。ギリシア兵たちは激昂してこの憎むべき都市に襲いかかると、てっぺんから土台に至るまで、すっかり平らにならしてしまった。その流血の只中で、特別な命を受けた何者かによって、和平会談に関する記録文書は灰燼に帰してしまったのである…

その頃、郊外のトラックの中では謎の男たちが「ティラナ陥落」を夢想する（ただし途中までは現実か夢想かわからないようになっている）のだが、なぜかその内容はгент・ルヴィナが描き出したそれと極めて類似していた。違うのは、彼らの望む破壊と殺戮が実際のティラナ市の各所（実在の名称が登場する）で行われるということと、マックスが自分を裏切った婚約者レナ（ヘレナ）の殺害に成功するという点ぐらいである。

なお、гентの空想中にあらわれるトロイアは、我々が知っている史実上の或いはギリシア・ローマ文学中にあらわれるトロイアとおそらく同一ではない。作中でトロイアの別名は「イーリオン」と微妙に異なる「ユーリオン」⁷と呼ばれている（Yllijonはアルバニア語 ylli jonë「我らの星」と、ギリシア語の Ilion（Ἴλιον）をかけた造語）。

4. 『怪物』におけるホメーロスの謎

гент・ルヴィナの空想の中で展開する「トロイア陥落」に関連して、この作品ではスレモフ Thremoh と呼ばれる詩人が登場する。その名はトロイア陣営

でのラーオコオンに対する（メネラーオスらの）糾弾の中で初めて明らかになる。

私をトロイア側の代表団長から解任するという勅令が出たのは、夜明け前のことだった。続く攻撃は昼になって、政府の会議の席で、それも思わぬ方向からやってきた。スレモフの問題だった【略】トロイアで一番の詩人にして『ユーリアス』の作者が、ヒッタイトへ逃亡した【略】

ホメーロスのアルバニア語名 Homer に縮小辞 th をつけると Homerth であり、これを逆にすると Thremoh となる。『ユーリアス』の原語 Ylliada は、アルバニア語 ylli『星』と Iliada『イーリアス』を組み合わせた造語であるから、このスレモフなる人物は否応なしにホメーロスを連想させる。実際、ホメーロスがスミュルナ Smyrna（現トルコのイズミル İzmir）の出身⁹⁾とする説もあるので、カダレはその話題に着想を得たのであろう。

スレモフは（この作品の）ラーオコオンの主張によれば、トロイア当局に認められて出国し、ヒッタイトの保護下で『ユーリアス』の粘土板への転写（楔形文字への翻訳！）に従事したという。ところが対ギリシア情勢が変化すると、それは「逃亡」であったことにされてしまう。

「スレモフの逃亡は、彼に対する疑いが正しかったことを示している」

蔵相が私の言葉をさえぎって言った。

「スレモフは何度も批判されてきたではないか、彼は詩の中で、我らの敵たるギリシアへの徹底した怒りを表明するどころか、全く逆のことをしているのだ」私は彼に答えた。

「それは、我々のような政治家が口出しすべきではない芸術の問題だ」

議場は再び騒然となり、私は前にもまして空しさにとらわれた。

間もなくラーオコオンは自宅に幽閉される。彼をかやの外に置いた状況でギリシアとの和平交渉が「順調に」進む中、ラーオコオンは自らの国外追放⁹⁾を恐れながらスレモフの身を案じるのだが、

実は、スレモフはそれから 69 日後に死んだのだ。しかしラーオコオンも、そしてトロイアの誰一人として、彼が最期を迎えたことをまったく知らなかった。それは、トロイア自体がその前に死んでいたのであるという、しごく単純な理由によるものだった【略】

スレモフはヒッタイトに着いた時には既に病におかされていた。身内の者たちとの別離に対する絶望感、祖国の運命に対する不安、自分の行為に対する疑念といくばくかの後悔の念、それらが彼を完膚なきまでに打ちのめした【略】

しかも「粘土板を用いるのは主に外交上の書簡や声明のため」と思い込んでいたヒッタイト人たちは、スレモフの制作意図を当初まったく理解できなかった。トロイア特使の説得でようやく通訳と秘書が用意されるが、

スレモフはそのことに何ら喜びの姿勢をあらわさなかった。うつろな目で彼は粘土板を見つめるだけで、その全身には、顔といわず髪といわず手といわず、際限のない苦悩があるばかりだった [略] 時折、何かを口にしようとするかに見えたが、顎に震えが出してそれを妨げるのだった。まるでそこに口枷を嵌められてでもいるかのよう [略]

それは、吟遊詩人¹⁰たる種族の、いにしえよりの苦悩であった。始まりははるか昔、文字が生み出された頃にさかのぼるが、とりわけそれは、禁断の言葉が始めて思想として表れ、彼らの詩もまた書き残されるようになった頃からのものだ。

こうして、自らの内面的苦悩と周囲の無理解にさいなまれながら、スレモフはほとんど作品を手がけることもできずに息を引き取る。『トロイアにとっては残念なことになるだろう、だがもう遅い、何もかも手遅れだ』で途切れた数十枚の粘土板は、ヒッタイトの滅亡と共に散逸し、ティムール軍の侵攻時に馬の脚に当たって欠け、さらに数百年後、数千枚もの行政文書（これは史実だが）に紛れて発掘され、解説にあたった研究者たちを悩ませることになる。

5.不安の継続

空想の小アジア世界と現実の1960年代アルバニア（ゲントらの日常と『謎の男たち』のやりとり）が交錯する作品世界は、ティラナで発生した殺人事件で唐突に収束する。その詳細は最後まで明らかにならないのだが、マックスがレナと間違えて別の女性を殺してしまったことが暗示されている。一方「木馬」と呼ばれる有蓋トラックに潜む男たちの一人が陰惨な死を遂げた（自殺がほのめかされている）が、それでも彼らは傾きかけたトラックから去ろうとしない。

（空想と現実の）世界を覆う漠然とした不安は、最後まで消えることがないのである。内外のカダレ研究ではこの作品に、全体主義社会がもたらす「不安」の役割を見るものが多い（Çausi 1993 他）が、これについてはむしろ作中人物が雄弁に語っている。

国家というものが、あるいは軍隊の団一というものが、不安や屈従や恐怖を生み出すことはできるだろう。（ゲント・ルヴィナの独言）

だが俺が作り上げたのは、天才的作品だ。現実と夢、かりそめと永遠のはざまにある作品だ。自分が作った木馬こそ、その足で神話の世界に立ち、その頭を現代世界へと向けた機械だ。それは、あらゆる時代、あらゆる世代の人々に適応し、恐怖をもって作用することのできる、恐怖の機械なのだ。力学の法則に従いながら、あらゆる世紀にそびえ立ち、また移動していくのだ。必要とされればどんな時にでも、まつろわぬ人々や街々の地平線上に突如その姿をあらわして、威圧し、人々の意識に影を落とし、その心に絶え間ない疑心と畏怖と不安を抱かせるのだ。（『設計士』の独言）

「君は『不安だらけだ』って言うけどね、いいかい、不安の創造というのは、どんな秩序も第一に注意を傾けてきたことのひとつのさ。武器や手錠を製造することと並んで、そこを重視しているんだよ。スフィンクスを見てごらん。ファラオの警察は、民衆がそ

の神秘的な姿を見て畏れるように仕向けたんだ、それ以上のことがあると思うかい？」
(гент・ルヴィナのレナに対する発言)

が、もちろんそれ以外の解釈も可能なところが、カダレ的 (kadarean) 世界の特徴と言えるだろう。

註

1) 第二次世界大戦後に旧侵略国イタリア・ドイツから遺骨収集にアルバニアを訪れた一団とアルバニア人との微妙な確執を描き、著者を「アルバニアのイエフトウシェンコ」として一躍有名にし、マルチェロ・マストロヤンニ主演で映画化 (1982) もされた。他、社会主義時代の代表作として、アルバニア民族の歴史や囚習に題材を取った『婚礼』(1968)、『城』(1970)、『三本柱の橋』(1978)、『冷血』(1980)、『裂けた四月』(1980)、出身地であるジロカスタルを扱った『石の年代記』(1971)、ソ連との国交断絶前後の世界とアルバニアを舞台にした作品『偉大なる孤独の冬』(1973) や『或る首都の11月』(1975) 等がある。『偉大なる孤独の冬』は1977年に『偉大なる冬』と題して再刊され、カダレの最大作にして最代表作として、欧州では高い評価を受けている。

カダレの邦訳は次の5作のみである (すべて仏訳からの重訳) ;

『砕かれた四月』(平岡教訳) 白水社 1995

『草原の神々の黄昏』(桑原透訳) 筑摩書房 1996

『誰がドルンチナを連れ戻したか』(平岡教訳) 白水社 1994

『夢宮殿』(村上光彦訳) 東京創元社 1994

『災厄を運ぶ男』(平岡教訳) (『世界文学のフロンティア 3』岩波書店 1997)

- 2) 発禁の理由は今も定かでないが、「あらゆる政治的ほめかしを嫌った当局の意向による」(Elsie 1997, 388) ものとする見方がある。
- 3) アルバニア版に比べると、コンヴォ版では後述する「謎の男たち」の描写が中心で、гент・ルヴィナに関する記述は少ない。
- 4) このトラックについて「Cen Tufinë 製」という記述があるが、どこの会社か (人名か) わからない。おそらく中国製と思われる。
- 5) しかもティラナの映画館では「アガメムノーン」と題する映画が公開されているのだが、市内に侵入した彼らは、広告看板のアルバニア語をなぜか理解することができない。
- 6) 原文ではフランス語と同じ dégel を用いており、現実世界の「冷戦」を連想

させる。

7) 作中、гент・ルヴィナが古代バルカンの地名イリュリア Iliria と現代アルバニア語の「ユリ・イ・リ Ylli i ri (『新しい星』の意)」をかけあわせて「イリオン」「ユリオン」「ユリ・ヨネ」等とメモに書きつける場面がある。そこから彼は「トロイア」の名を「古くから信じられている通り」ギリシア語の「イーリア」からではなくアルバニア語の「ユリ・ヨネ」から派生させ、同様に「イリュリア」の名を「ユリ・イ・リ」に由来させようとするが、もちろんこれは文学上の話である。

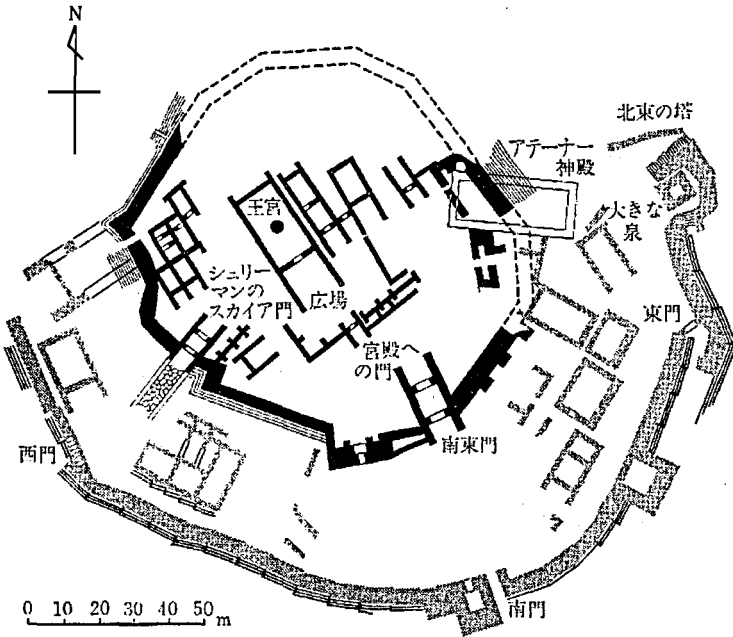
8) だからといって「トロイア人」と言えるかどうかは定かでない。

9) ここで、「(教会からの) 破門」や「(党からの) 除名」を意味する動詞 *mallkoj* が用いられていることは興味深い。

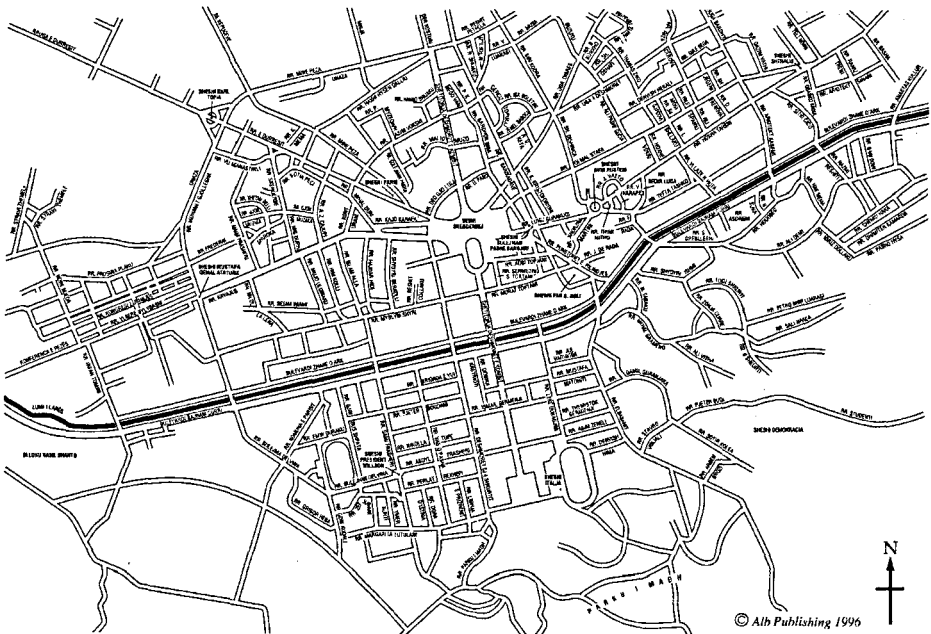
10) 「吟遊詩人」の原語 *aedēt* はフランス語版でも *aèdes* で、ギリシア語 *αοιδός* 「歌人、詩人」に由来する。

参考文献

- Çausi, Tefik (1993). *Universi letrar i Kadaresë*. Tiranë, Dituria.
- Çausi, Tefik (1995). *Kadare. Fjalor i personazheve*. Tiranë, Enciklopedike.
- Elsie, Robert (1986). *Dictionary of Albanian literature*. N.Y., Greenwood.
- Elsie, Robert (1997). *Histori e letërsisë shqiptare*. Pejë, Dukagjini.
- Hasani, Hasan (2003). *Leksikoni i shkrimtarëve shqiptare 1501-2001*. Prishtinë, Faik Konica.
- Kadare, Ismail (1990). *Përbindëshi*. Prizren, Vreber.
- Kadare, Ismail (1991). *Përbindëshi*. Tiranë, Lidhja e shkrimtareve.
- Kadare, Ismail (1998a). *Vepra 6*. Paris, Fayard.
- Kadare, Ismail (1998b). *Œvres complètes 6*. Paris, Fayard.
- 平岡敦 (1996) 「“周縁”からのメッセージ——イスマイル・カダレ」『現代ヨーロッパ文学の動向 中心と周縁』中央大学出版部 p.287-299



トロイア市



ティラナ市